講　演

2015 インタースキー“指導者の祭典”他

ＳＡＪナショナルデモンストレーター
監 督　森　　信　之　氏

１、はじめに

ただ今ご紹介にあずかりました森です。どうぞよろしくお願いします。

スキーの大先輩方と人生の大先輩方の前で高いところから恐縮です。藤島会長から１年ぐらい前に「私ども指導者協会の“集い”で講演を」という話を聞きまして受けていいものか悩んだのですが、スキーに対して熱い方々が多いとお伺いしたものですから、今回のこの席に立つことになりました。お招きいただきまして本当にありがとうございます。

ご紹介にもありましたように青森出身です。経歴からいうといろいろありまして、アメリカにも行っておりますが基本的には津軽弁です。英語も少し話せるのですが、津軽弁で話した方が僕は話しやすいです。特にスキーの技術的なところは全部そうです。

北海道の寒いところはそうなのですが、あまり口数を多くしないです。大体擬音語で説明するので。擬音語というのは力の強弱とか、流れとか、タイミングだとか、「グーンといって，スッといけ」とか、そういう風にするだけでスキーはうまくいくのです。今日はそういう感じで最初から最後まで行きたいと思うのですが、津軽弁は聞きにくい、ヒヤリングが大事なもので、ちょっと伝わらないところもあると思いますので、いろんな形でお伝えできればと思います。

北海道に来まして７年になるかと思います。小樽スキー連盟さんにお世話になって６シーズン目になります。キロロリゾートに努めていた関係から道連さんにはお世話になっており、こういう機会にも恵まれています。本当に感謝しております。どうもありがとうございます。

２、インタースキー

（1）アルゼンチン・ウシュアイア

今回の「集い」に対しましてテーマをいろいろ考えさせて頂いたのですが、一昨年行われましたインタースキーについてご紹介いたします。ここにいらっしゃる登山本部長もインタースキーの委員会会長をしておられて、副団長としてご参加くださいました。

ＳＩＡさんも入れまして総勢23名で、地球の反対側に行きました。アルゼンチンのウシュアイアという所で、ほとんどチリなんですが南極に一番近い街です。とは言っても南極までは1000㎞位ありますが。非常に寒いところで、開催したのが南半球なものですから季節が全く逆で、9月上旬だったのですが、もともと年間の平均気温が14度という所で寒いのです。9月に行った時も山頂はマイナス２・３度。下の方に来ても一桁台で寒かったです。初めて行ったスキー場ですが、標高差もあって雪も固くスキー人口も少ないところなので少し寂しい場所の印象でした。山のスケールが大きくてコースも色々な斜面がありました。どちらかと言えば，緩斜面がなくて急斜面ばかりのコースだった印象です。ここで、第20回のインタースキーというスキーの祭典が行われました。

（2）委員会

インタースキーは各種委員会がございまして、インタースキー・インターナショナルという国際スポーツ指導が中軸となってインタースキーを開催します。

その中には様々な連盟がありまして皆さんもお聞きしたことがあるかと思いますが、国際スキー教師連盟（ＩＳＩＡ）。国際スキー指導者連盟（ｉＶＳＩ）。これはこのシーズンの終わりの 3 月 19 日から約１週間、長野県白馬村八方スキー場でこの大会が開催されました。

もう一つ、国際学校体育指導者連盟（ｉＶＳＳ）というような部会が、インタースキー委員会の中に入って結成されています。以前に比べると各委員会の役割がありインタースキーの中でその行事が行われています。

日本は島国ですので最近はインバウンド。海外から来られるスキーヤーも多く、特に北海道は「北海道ブランド」といいますか。海に囲まれている関係もありまして，非常に雪が降る新雪があるというところで、ここに魅力を感じている海外のお客様が多く来道されています。しかし、海外と比べるとルールがまだしっかりと出来上がっていないという印象がございます。

この国際スキー指導者連盟というところでは、やはりヨーロッパが中心となっていることから年間を通して滑れる「氷河」を持っているオーストリー、スイス、イタリア、フランスなどの国があります。約 30 ヵ所くらいですか年間を通して滑れる氷河スキー場を持っているところがあります。

そこにはいろんな国の方が来場されますので、一ヵ所で 100 万人とか。フランスのスキー場はヨーロッパでも来場者が最も多いのですが、一番多いところでは 300 万人ほど年間を通して来ると言われています。そこには観光で来られる方、トレーニングで来られる方、商売をする方など目的が様々です。ビザも含めていろいろなルールを作っておかなければいけない、というようなことをこの場所で意見を交換したりします。このような会議もインタースキーの中にございます。

インタースキーのメインとなるところは、各国々で行われているスキーの活動とか、指導方法です。いろんな形でキーレクチャー、基調講演などで発表し、その国の滑り方、トレーニングの仕方、教え方というものを、雪上でのワークショップで発表します。各種会議は全部報告書から抜粋させていただいて。こういうような会場で選挙をやったり、基調講演を行ったりという形になっております。

日本でいう研修会ですかね。北海道でいうと夏期研修会、ブロック研修会。シーズンはじめに行っているようなものと理解していただければと思います。

（3）４年に１度の開催

オリンピックと一緒で 4 年に 1 回行われます。

1951 年にオーストリーで始まって以来、今まで何回も行われています。日本では、1979 年に蔵王温泉で開かれております。この頃は、スキー人口もどんどん伸びるという時期だったというように思います。日本での 2 回目の開催は 1995 年に野沢温泉です。日本ではこの 2 回行われています。この頃はバブルも少しはじけたといいますか、ピークを超えたところです。長野オリンピックの 3 年前になります。

2015 年には今報告したウシュアイアとなっております。こういうように見ますと、ヨーロッパで行われている回数が非常に多くて、アジアで行われているのは日本と韓国だけになります。

ピョンチャンでインタースキーを開催したのですが、その少し南の方で来年オリンピックが開催されます。そしてその４年後には北京で冬期オリンピックが行われる、アジア圏内ではビッグイベントが連続して行われるのですが、その次に札幌に来てもらえればなあと思っています。

アジアで2回やれば3回連続でくるのかどうかわかりませんが，どこも立候補がなければ北京の後に札幌に来るのかなあ、とちょっと期待をしています。

2020年には東京オリンピックもありますが、大きな大会が来るといろいろな意味で目標も出来ますので選手も頑張る、周りにいる皆さんのような指導者の裏方となる方々も、いろいろな意味で気合いが入っていくと思うのです。そのような大会が来ると、目標も大きくなりますので良いことかと思います。

先シーズン、札幌で冬季アジア大会が行われました。オリンピックと比べるとまだ知名度も低いというのはあるのですが、大きなワールドクラスの大会をやると運営面でも大変だと思うのですが、地区連盟さんのお力を借りて成功裏に終わっておりますので、オリンピックが来た時には、札幌ではほとんど問題なくうまく運営できるのかなあと思っております。

（4）オーストリーの発表

インタースキーの各国の発表が、雪上と室内会議場であります。

その中で国の発表の内容もさまざまですが、今回テーマの中に入れさせてもらいましたのは、普及活動も含め世界的に見てスキーもゴルフもそうなのですが、プレーヤー人口が非常に少なくなってきております。スキー場の数やゴルフ場の数も多いのですが、来場者が少なくなってきているということがいえます。将来のことを考えますと、普及活動を一番に行っていかなければいけない。特に目を向けて行なわなければいけないことの一つに「子どもに対してどのようなアプローチをしていくことが望ましいのか」という事で、そのテーマをあげていた国が6ヶ国ありました。

その一つに、スキーのメッカであるオーストリーがございます。オーストリーも将来的なところを加味して、ジュニアに非常に力を注いでいるということがいえます。ワークショップ、キーレクチャーの所も見に行きました。基本的にはオーストリーの教程や教本もそうなのですが，ここ30年ぐらいあまり内容は変わっていません。

当然高い所から低い所に落下していく力を利用して滑るスキーに関しては、論理的なところは変わらない訳です。ただ使う道具の進歩や滑る環境、前はあまり整備されていない自然の状態の雪質で滑っていたものが、圧雪車ができてきれいな所を滑れるようになりました。後は輸送力ですね。ロープトーからTバーになったり、シングルリフトがダブルになったり。トリプル、クワットリフト、ロープウェー、ゴンドラと非常に簡単に上まで行けるようになりました。時代とともに滑る環境は変化しているが基本操作や基本動作は大きく変わっていないことを発表していました。

（5）日本の発表

日本の場合乗り物に関しては、陸運局管轄で索道協会というのがございまして。管轄は全て鉄道課の方になっていますので、非常に厳しいルールのもと制度ができています。それでどうしても料金が少し上がってしまうという現状がございます。基本的にはスキーそのものの考え方や技術というものは、オーストリーとは変わっていません。教程や教本は何年も変わらなくて、プラスαでどんどん改正していくというような形で、ガラッと大きく「新しい技術ですよ」というようなことはない訳です。

北海道スキー連盟さんの方で、一回技術の取り扱いの方向性を大きく修正して頂いた。具体的に言うと、外側があれば内側があるとか、そういったところを軌道修正して頂いたお陰でまた良い方向に戻っていったというところで、日本の技術の発表もそれ以降はインタースキーでも非常に良い評価を受けております。

ただ今回のインタースキーでは特に注目を浴びたのが、これからの将来のスキーヤー「子ども達」に関してでした。ここで取り扱っているものも非常にシンプルで、簡単なものから難しいものへ、ゆっくりしたものから徐々に早いものへ、というスタイルを貫いてやっていくということをオーストリーではよく伝えておりました。

（6）アルペンスキー

後でまた、ヨーロッパのアルペンの写真とかも使いたいと思いますが、アルペンスキーがやはりヨーロッパでは盛んなのです。特にオーストリーは日本でいう野球のようなものなのです。

1番人気があるのはサッカーですね。サッカー人口というのは限られているのですが、その次に人気があるのはスキーなのですね。スキーは視聴率が非常に高く、週末になるとワールドカップが各地域で行われるのですが、必ずテレビで放映されるので街に人が少なくなります。みんな1本目と2本目の時間がわかっていて、その頃になるとテレビの前に集合して、お酒を飲みながらテレビを観戦している。ですから、視聴率が非常に良いのです。それは小さい子どもからご年配の方まで見ている人気のあるスポーツなのです。

歴史が違うといいますか。アルペンスキーの技術を基本として、技術を展開しているというものがあります。これはどういうことを意味しているかといいますと、バランスを取るということとスピードをしっかりコントロールするというような意味では、外傾や外向をしっかりつくって滑りましょう、落ちていく力を色々な形で制御するという意味では、外側スキーのインエッジを巧みに使いましょう、そういう所がベースになって技術ができている。これは何十年前から一緒で、そこを基本にしているというところがこのインタースキーでも言っていましたので、安心したといいますか、やはりそうなのだなと再確認をしたレクチューでした。

（7）イタリア他

その次はイタリアで、この国も面白い国で「子どもには色々なことを言ってもわからないでしょう」。耳からの情報と見た目からの情報など色々な情報源があると思うのですが，子どもの場合は言葉で説明するよりも目から見て情報を拾って頂きたい、学んでいただきたいというので、イタリアの場合はアイテム、小道具をたくさん会場に持ってきて紹介していました。カラフルなアイテムを使って遊びながら体験するということを説明していました。

これも違う場面で写真をご紹介したいと思います。

他の所で言いますと、ドイツやカナダも色々なテーマがあったのですが、お国柄なのでしょうか、話す内容が非常に難しいことを教授がたくさん言っていたので、僕には理解が難しくてスキーにどう生かせば良いかわからなかった発表でした。ただ時間をかけて分析するとどこかにヒントがあるのかな、というような発表がありました。

スロベニアとスイスも、子どもに対する指導法ですとか、子どもに対するインストラクターの訓練メニューをどういう風に作り上げるか、という発表を行っていました。

どこの国も、今後のスキーヤーに目を向けて、いろいろなことをアプローチしてきていたと思います。ここは非常に参考になったところでした。

３、日本のスキー事情

（1）スキー人口

ここでインタースキーから少し離れ、国内のスキー人口の推移とか、スキー用具の売り上げの推移とかをまとめたものがございます。

スキー人口の一番のピークが 1997・8 年。1800 万人位スキー人口がございました。そこからスキー人口がどんどん減っていきました。このデータから見ると 1998 年の長野オリンピックの頃がピークというデータになります。ここ数年でいうとピークの時の半分ですね。これは 3 年位前のデータですので、今は更にもう少し減少しているのではないかと思います。

1990 年まではほとんどがスキー人口の推移でした。僕がちょうどアメリカに行っていた時がそうなのですが、スノーボードというスポーツがアメリカのバーモント州で開発されて、日本に普及して販売が始まったのが 1991・2 年頃で、はっきりした数字が出てきたのが 95・6 年位のシーズンです。斜めの線の上部がスノーボードの数字になります。それから考えるとスキーヤーの減少率はもっと大きくなっていて、4 分の 1 くらいにまで減っているといえます。

5 月 19 日にＳＡＪの“スノーアワード”というのがございまして、そこの研修会でＳＡＪの会員数ですとか有資格者の数ですとか、全体的な数字も出ていますので、冬までの研修会の時にはデータを皆さんにお披露目できるかと思います。

（2）スキー用品

スキーとスノーボードなど用具の売れた数と売れた金額です。

あまりに大きな金額なのでピンとこない所もありますが、一番のピークの 1992・3 年のバブル期では、マーケットとしては 4000～4300 億円位の市場がございました。それがどんどん下がっていって 4 分の 1 位になって今は 1000 億円位となっています。スポーツ量販店さんでいうと、スポーツデポさんとかゼビオさんですとか、スキー以外の全てのグッズを含めて 1200 億位の売り上げがあります。メーカーさんでいうとミズノさん、ナイキさんがこの辺の数字なのですが、スキー業界においてもスキー・スノーボードのマーケット市場は、ピーク時の 4 分の 1 になっているということがいえます。

皆さんに関わるスキーでいいますと、従来は全部単品で売っていた物が、今はスキーとビンディングがセットになっているとか、スキーとビンディングの間にプレートがあってプレートがセットになっている。ここ 10 年位では、各スキーメーカーがスキーブーツも開発して 3 点セットで販売している所が多いかと思います。ですから 1 台ずつ単品で買うのと 3 点セットで買うと。3 点セットで 15 万から 20 万位になるのかと思います。スキーの用具だけ昔と比べるとちょっとだけ高くはなっているのですが、あまり極端に上がったり下がったりはしていないのですね。スキー以外の遊び道具が普及していますので、今の若い人たちにとっては、遊び道具がスキーの用具をそろえる時の壁になっているかと思います。

（3）スキー場

これはスキー場の数ですね。全体的には長野県がスキー場の数が多くて日本全体の 20%。次に北海道の 13%、新潟県が 12%となっています。詳しく見てみますと北海道に約 100 ヵ所ありますが、そのうち 10 万人を超える来場者のあるスキー場は 12 ヵ所ほどあります。

スキー場の方は数が多いこともあるのですが、入り込みでいうと 4 万人位の集客ができている所は何とか創意工夫しながらやれるかなと。それ以外になると厳しくなっているのが現状です。

実際にはスキー場の運営も厳しいので、良い所とそうでない所がはっきりしていると思います。スキー場に関しては法律がありまして、スキー場をお返しできない、やめられない現状があります。スキー場をやめる時は建物やリフトなどを全部撤去して、木を植林して5年、10年経って返さなければならないということは非常にお金が掛かるのです。そういう理由から、どうしても休止をして「今お休みですよ」というような形を取らざるを得ない現状があります。

スキー場があるのですが休止している、実際には営業していない所がこれから北海道はいくつも出てくる気がしています。作った以上はそこでスキーをする方、ボードをする方をどんどん増やしていかないと経営が難しいと思います。

（4）インバウンド

ここにある数字は日本に海外から来られる数字になります。

どこから来られているかというと1番近い所では台湾からですね。14年のデータなのですが、次に韓国、中国、香港、タイと日本に来られております。大体1000万人位が東南アジアからの数字になるといえます。これを近い将来2000万人に増やしたいと考えています。

北海道の場合には、この10数%が来場されているので今120万人位が来られていて、そのうちの冬のシーズンだけで70万人位来ているかと思います。

それを受け入れるニセコエリアなどは、海外みたいな感じになっています。

特にオーストラリアのお客さんが多くて、オーストラリアは南半球にありますので、シーズンが逆になっています。むこうは真夏に夏休みが2ヶ月ほどあります。そのうちの3週間、日本に来るケースが多いので3週間ホテル住まいになります。それで不動産屋が入って、ホテルというよりもコンドミニアムを建てて、2〜3週間のスパンでお貸ししているというような形ですので、日本人が1泊2日、2泊3日で行けるような環境ではなくなってきているということがいえます。

一度そういう風に不動産屋が入って販売しますと、長期滞在の方々がイースターが始まったり、チャイニーズホリディが始まったりと。海外のお客さんのために運営をせざるを得ない状況になっている。3月になるとそういう方々がいなくなる。そうすると今度はショートで日本人向けに売り出してくるというような現状があります。その辺も含めまして、インターナショナルの海外から来られるインバウンド対策といいますか、もしくは道民の方が気軽に行けるスキー場というものをスキー場側は考えて、料金を含めて設定していかなければならないのではないかと思っております。

海外の方が来て頂くことは非常にありがたいのですが、その国の法律もありまして、男子しか海外に出られなかった国も、今は女性の方も気軽に出られるようになったとか。海外にはビザに種類がありますが、日本には非常に出やすい働きやすい特典がありますので、まだまだ増える可能性があると思っています。

中国では、ここ数年で日本と同じ位540ヵ所にスキー場が増えています。中国には基本的に自然雪がありません、非常に寒い所ですので人口降雪機でアイスバーンばかり滑っているのです。ちょっと難しいスポーツというような捉え方があるようです。本当の自然雪で滑る機会を作ると多分日本に来ると思います。北海道というブランドが非常に空気、水、食、マナー、接客、いろいろな意味も含めて「価値がある」と色々な国の方がおっしゃっていますので、これからまだまだ来られると思います。言葉のバリアといいますか壁はありますが、こうした大人の初心者の方にスキーをどういうようにアプローチしてお伝えすれば良いのか、指導者協会の皆さんの方からいろいろと提案をして頂きたいと思います。

（5）初心者指導

大体初心者というと子どものイメージがあるのですが、大人の初心者というのは体が大きいので、1回転倒すると起こすのが大変なんです。力だけで起こすのか、テコの作用で少し高い所から低い所に引っ張るとか、起こし方の指導みたいな具体的な案がないとなかなか教えられないというようなこともあります。上級者はリフトに乗って急斜面に来るのですが、初心者というのは緩斜面で滑らなければいけないので歩いて登らせることが良いのか、それともリフトに乗って緩斜面をずっと滑らせるのが良いのかとなると、ロケーションといいますか、コーススペック、コースの条件もしっかり整えておけば、一般的にドル箱スキー場になるのですね。

それが整わない所では、指導者のスキル次第となります、指導者の力次第でレッスンがうまくいくかいかないか、が決まってしまうところがありますので、この辺は皆さんのご経験からの良いアイディアを連盟の方に頂いて、スキー学校委員会に落とし込んで指導の在り方というものをしっかり作っていくようなきっかけにしていければと思いますので、是非皆さんも研修会に行った時に色々な技術的な所を、若い人にお伝えできるような準備をしていっていただければと思います。

アメリカでは昔は735ヵ所スキー場がありまして、これからどんどんスキー場の数が減って今は500を切っています。250ヵ所位スキー場をつぶして無くしています。その代わり、スキー人口の方は水位を保ってもしくは上昇している。これは理想ですね。

日本もスキー場の数を減らしてスキー人口を増やす形になれば、この産業はまだまだ行けるのかなと思います。口で言うのは簡単なのですが、アメリカのリゾート地のスキー場は、研究して、チームを作ってスポンサーを集めて投資をして作り上げた、という実績がありますので、日本もそういうようなマネジメントをする会社というものが、必要になってくるのかなというように思います。

４、スキースタイルの歴史

スキーのスタイルの歴史を振り返ってみたいと思います。

この頃は前過ぎるのでよくわかりません。軍事訓練みたいな所の写真になるかと思います。

1956年、この頃はコルチナ・ダンペッツォのオリンピックの頃だと思います。猪谷千春さんがメダルを取った頃になるかと思います。

66年になると、サングラスだとか着ている物だとか。ブーツ、ビンディングというものも最新の物になってきています。76年、この頃からすごい勢いでスキー人口が増えて、スキー場の数も増え始めた頃のファッション。大分格好良くなってきている。86年になるとバブルの全盛期になって、非常にファッショナブルになって。

これはオリンピックの少し前、野沢でインタースキーのあった頃でデモパン、デモセーターだったと思います。2000年に入るとカービングスキーができて、身長よりも低い短いスキーになって。ウェアーもタイトなものから少しルーズフィットなものになって。最近でいうとヘルメットをかぶるようになって、少し雪質に合う広めのスキーをはいてというようなファッションになって。

（写真10）この30年で大きく変わったスタイル。ちょっと大げさに書いていますが帽子、サングラス、ヘルメット、ゴーグル。顔はフェイスマスクとかネックウォーマーをして、スキーは細い寸胴なスキーから短いファットスキーになっている。ブーツでいうとリアエントリー、ウェアーがワンピースから今はラフな形になって、足がほとんど見えないくらいの少しだらしないかなと思うくらいの物が普通になってきている、というようなスタイルの違いがございます。

スノーボード。80年頃、ジェイク・バートンさんという人が作って。ちょうどアメリカに行って

いた時に知り合って、20年ぶり位に会ったのですけどバートンを作った方です。スノーボードが入ってきて、大分良い形で人数も増えて来場者も多くなってきていたのですが、ここ数年は数が減ってきています。ボードをやっていた方も30、40代になっているというところで大分減少してきております。スノーボードの方も若手をこれから育てていかなければいけないということがいえます。

５、氷河でのスキー

ちょっと話が前後しましたが、ヨーロッパでは氷河を持っている所がたくさんございます。

パッソステルヴィオというイタリアです。3000m級なので木がありません。

氷河ですので溶けて移動したりします、一番上の所はリフトが無くて全部Ｔバーで、移動しても、センターがずれても、すぐ戻せて風に強いという利点があります。ヨーロッパはまだＴバーリフトの使用率は高いです。

これも同じスキー場ですね。広くて長いです。こういう所でスキーをしていますので、日本の皆さんの使用しているスキーのサイズとはちょっと違って、平均で15ｃｍ位ヨーロッパの方々のスキーは長くて寸胴です。

日本の指導者の皆さんは、大体スラローム用のサイズのスキーになりますので、男子で165ｃｍ前後、女子で155ｃｍ前後の短いスキーで、シャープな形のスキーです。そういうスキーでここを滑っていると、ターンをいっぱいしなきゃいけなくなってくる。疲れてなかなか下にたどり着かない。なので、向こうの人たちは寸胴なスキーで、適当な感じで真っ直ぐ来ますね。そういった環境の違いから使う道具も変わってきます。

ヨーロッパはアルペン競技が盛んですので、これはフランスのティーニュというスキー場です。

午前中は大回転で20セット位ポールを張って各チームがトレーニングをしています。

一般の方は、メインの一番良い所を滑っているのですが、向こうはいくらでも広い所があって雪が固いので、アルペンスキーのトレーニングする環境が非常に整っていると言えます。

日本チームもよくこういった所に行ってトレーニングをしています。ただ3000mありますので、高山病になったり。酸素が薄いので慣れていない人はつらい感じですね。

６、ワールドカップ

これは、オーストリーのキッツビューエルのダウンヒルのゴールエリアで７万人入ります。ドイツ人やオーストリア人で、７万人来ているうちの８割の方が酔っ払っていますね。

ビールを飲んでこういうのを見ている。非常に見やすい形で駐車場から歩いて来られる。

駐車場からリフトに乗ったり、ゴンドラに乗ったり、上の方にコースがありますよ、というような所では、今はワールドカップをやらないのです。全部ボトムにゴールがあるように近い所に最後の急斜面が見える所というのが, ワールドカップ開催の条件に入っているということが言えます。人気があるのですね。

こうした安全管理をするために、ネットが張られています。Ａネットというのは支柱に掛かっているワイヤーからネットを上の方から張ってあるもので, Ｂネットいうのは僕の身長位のところのもので下にあるやつです。あるいは三重四重にして、突っ込んでいっても外にはみ出ないような形で設定しているといえます。日中だけではなく、スラロームとかになるとナイターでやるケースもあります。気温の低い時にやるとか、仕事を終えてから皆さんが見に来られることも踏まえて、大体ナイターでやる時は平日が多いのですが、こういうような開催もしている。

ここはシュラドミングという所なのですが，スタンド的になっているので、全コースがちゃんと見えるように設定してある。ここも４万５千人から５万人くらい入るセッティングになっています。最近のビッグイベント、世界選手権やワールドカップやオリンピックで行われるように、国対抗でデュアルレース、前にプロレースというのがあったと思うのですが，よーいどんで滑って早い遅いというのが目で確認できる、というようなものを今やって盛り上げています。

７、サマーゲレンデ

残念ながら北海道には、サマーゲレンデ、プラスノー、ピスラボ、グラススキーとかをやっている所がないです。ただグレスデンが津別にあります。

どこか北海道に１ヵ所、滑る所を作りたいなと思いますけれどね。それができたら皆さん来て頂けたらと思います。場所によっては春のうちにこういう風に雪を集めている所があるのですね。いっぱい集めてシートを二重三重に被せて、真夏に雪を広げてちょっとしたゲレンデを作って、そりなどで遊ぶというイベントをやっている所もあります。これは福島の檜枝岐村という所なのですが、ニセコの一部にもこういう風な雪をいっぱい貯めている所がありまして、夏に雪が欲しい時はそこから譲って頂けます。輸送料だけ払えば、ステージが山になるくらいの雪は頂ける。そういうイベントをやっている所もあります。

８、キッズスクール①

先ほどのインタースキーのところにもありましたキッズスクールです。

これはリフトの乗れない人が、エスカレーターといいますか、ムービングベルト、風よけとか雪よけでトンネルのようになっているものです。距離的には30mから長いもので70m位あるのですがこのようなものがあります。

どちらかというと、登っていく時にも楽しんでもらう状況を作るアイテム、あとは絵を使ってデザインをしたり。スキーをするというより遊園地に来て、スキーの道具をつけて遊ぶという演出をしている所が多いです。このアイテムもイタリアでこういうアイテムを持ってきて、ディスプレイして、皆さんに体験して頂いたというようなことをやっていました。

このようなチュービング。これはオーストリーですが、牛の鼻にロープをつけて歩かせてトレーニングをするという発想なのですね。それをそのまま使っているような。子ども達がこれに乗って引っ張られていくと非常に面白がるのです。

このように、ただ乗せて上がるだけではなくて、飾り付けをしてあげるといるだけで楽しい。ただ北海道でやると、雪がたくさんあるので除雪が大変ですね。何かをやった時には表彰台にバックボードを作ってここで表彰式をやったり、メダルをあげたり、ディプロマをプレゼンテートしたりとかやります。ただの掘っ立て小屋のようですね。こういうようにきれいにしていくと夢のあるものに変わるということです。これをキッズステーションといいますか、いろいろな呼び方があるのですが。

（写真18）これもフランスのアボリアという所なのですが、ひとがたくさんでよくわからないのですが実はアイテムがあちこちにあるんですね。フランスという国は、ホテルというのは全部シャレーですね。１週間単位で借りられる。フランス面白くて、２月になるとバケーションがあるのです。２月の第１週目はパリの方の州が１週間お休み、第２週目になるとパリの隣の州が１週間お休み。３週間目はその隣、４週間目はその隣と冬のバケーションが１週間ずつずれているのです。

ですからスキー場は、２月に予約を取るのが大変なのです。それもシャレーが１週間刻みで予約に

なっているので、日曜日に入ると土曜日にはアウトしなければならない。このキッズスクールもそうなのですが、1週間単位で予約するのです。フランスはそのような制度になっています。

ここで開発しているキッズのスクールというものがキロロリゾートにもありまして、アニー・ファモーズさんという方なのですが、オリンピックのメダリストです。先ほどのはこの方のスクールですが、提携をして今年で10年になるのですがキロロで行っています。

ちょっと雪が多いので除雪とか、設営がとても難しくて大変なのですが、これをやり始めて1シーズンで子どもが1万人入っているということですね。単価でいうと4,000円とか5,000円なので売り上げはわかると思います。

ここは色々なアイテムもあって、ループをくぐったり、登る時にムービングベルトがない時にはマットを敷いて登っていくというように、どこの局面でも楽しくやれる状況を作ります。くぐったり、風船など、出来るだけ目からの情報を含めまして明るい色を必ず使って。風船にタッチするというようなかたちで右に重心を移動したり，左に重心を移動したり。そして体重を乗せると左の方にターンしていく、右の方にターンしていくというように、運動要領だとか体重の乗せ方だとか、そういう技術的な所というのは一切子どもには言わないで、アイテムを使って「こっちに行きましょう」「あっちに行きましょう」とかというのをベースにやっていくと、知らず知らずのうちに体で覚えていくというような方法なんですね。

９、キッズスクール②

これはイタリアでもフランスでも、道具をうまく利用して子どもの興味を「スキーは楽しいよ」と教えていくということが重要で、こういうスクールをやっているところが今伸びてきて、スキー人口も増えてきているといえます。ただここに時間をいっぱいかけてしまうと、ここで満足してしまうのですね。なので、ここは出来るだけ短く半日位で、要領を得たら実践でリフトに乗る、もしくは、緩斜面をインストラクターと滑り降りてくる、というふうにすぐここを卒業させるようにする。上手くいかないようならまたここに戻ってくるというような形で使っていくと非常に良い。

修学旅行などもそうなのですが、先生方が預かった子ども達をすぐ登らせるだとか斜滑降を練習する、止めるだとかを全部口で説明しているということがあるのですが、中学生・高校生なのでそういうやり方が1番良いのでしょうけど、こういうアイテムなどを使うと違う形でやれるのではないかと思いますので，初心者向けの指導方法はまだまだいろいろなやり方があるのではないかと思います。（写真19）これは小樽にあるオーンズという小さいスキー場なのですが，そこでいろいろこういうアイテムを使って、今やり出しているところです。ですから、教える先生はスキーを持たなくてもスキー靴を履いていなくても良いわけです。スキーのインストラクターの免許もなくても良いです。子どもさえうまくコントロールできれば。ですから幼稚園の先生とかがここにいると完璧にこなしてくれます。そのような形になってきていますので、現場の雪の上で教える先生のスタイルも少しずつ変わってきているのかと思います。

10、キッズスクール③

これはスキー大会ですが、雪にマーキング。ちょっと見にくいのですが、白い雪に赤とか青でスプレーをして。カーブしていくとか、ショートポールとかマーカーを置いてそれを目標にそこをくぐっていくとか。ポールを滑るより、１歩手前の目標物に対してそこのラインをいきますよ、どのタイミングで動き出すと次の方向に効率よく曲がって行けますよ、というような雪にイラストを描いて、う

まく滑れるようなきっかけを作るというような大会をすでにやっているのですね。
　非常に良いと思います。こういったアイテムとしてスキーを滑る前に、フワフワやそりで遊ばせるのも有りかなと思います。ただこれはコストも掛かりますし、管理もちょっと大変ですが、こういうようにやっている所が多く出てきました。

11、アライメント
　皆さんには、アライトメントといって体の調整があります。年を取ってくると筋力が弱ってきたり、関節が硬くなってきたりなど、曲がった状態でバランスを保つことが多く、このような状態でスキーに乗ると、体重を乗せやすい足と乗せにくい足が当然出てくるのですね。
　なので、いくつか直す方法があるのですが、一番良いのはこの歪みをなくせば良いです。少し体を鍛えるのか柔軟するのか。歪みが出ると加重するポイントにバラツキが出るという分析が出ていて、ターンがスキーのラディウス通りに曲るのとターンが伸びてしまう、押さえが効かない、エッジの捉えが甘くなるとかそういう物理的なことを発表している教授がいます。
　どういう風に直すかというと、レーザービームがありまして、足首から膝のセンターの所までレーザーを引っ張って、曲がっているか曲がっていないかをインソールを使って「真っ直ぐの位置に立てます」「少し外側に膝が行っていますよ」「内側に入っていますよ」というのがわかり、フラットになると真っ直ぐに立てるということなのですね。そうすると、荷重点の所にうまく体重を乗せかえることが出来ます。こういうようなことをヨーロッパのアルペンの選手も、風の抵抗も含めて足を真っ直ぐスクエアに出来るかというような、風力のテストをしながら確認をしているのです。
　こういうトレーニングをしてアライトメントの調整をしています。
　去年のワールドカップの２番とかになっているフランスの選手なのですが、ヨーロッパに行くとブーツをチューンナップするケースがあるのですが、大体の人がフォーミングをしています。
　ブーツが大きいとか締まりが悪いとかはほとんどありません。どこか足が当たって痛いとか、シェルを出さなきゃいけないとか、削らなければいけないとかはあまりやらないのです。フォーミングをして足型にうまく合わせる、インソールをフラットに真っ直ぐ立つようにする、という風にすれば大体決まりです。
　こういう事をアルペンの選手がよくやっています。日本の選手だけですね。あまりやっていないのは。ちょっと遅れていると言いますかそういう習慣があまりにもなさすぎます。ちょっとお金が掛かるということもあるのでしょうが認識が違います。
　ダッジさんという方が作ったオールカーボンのスキー靴です。
　非常に軽いです。多分世界で一番軽いブーツですね。リフトに乗って足をダランとぶら下げている時、足首とか膝関節が痛くなってしまうケースがあります、こういうできるだけ軽いブーツは魅力があるのかなと思います。重いスキー、重いビンディング、重いブーツ、ちょっと手強いと思いますので、今、軽い物がいっぱい出ていますのでよく見ておいて頂ければと思います。
　ちなみに今日明日、カスタムフェアーというのが札幌の東コンベンションセンターで行われていますね。そういう所に行くと良い物と出会えるかも知れませんね。アメリカなどは特にそうです。
いろいろなメーカーの、Ｋ２のブーツだとか、ラングのブーツだとかをひとくくりにして、フォーミングという物を販売しているのですね。ですから手頃な値段で、足が痛くならないようなジャストフィットするような。この名前もシュワーフットという名前になっています、こういうような事をやって整えていいます。

12、指導法

今回のインタースキーのテーマから、市場調査、アライトメント、そしてスキーの技術的な所ですが、現場ではＳＡＪの論理的な技術の組み立ては非常に大事なのですが、実際に雪の上に立つとそこを表に出すのは研修会以外は２割位で、あと８割は上手く分かり易く体験させて実感させるというような教え方をしていくと良いかと思います。

飴と鞭であると思うのですが、大体の方は飴をいくつも配る。飴もいろいろな味の飴がないといけない。一つの味しかないと口に合う人と合わない人がいます。なので、ちょっと苦めの飴があったり甘い飴があったりという形が良いかと。

鞭でやるケースもあるのですが、今はパワハラと言われますので十分気をつけて下さい。

言葉遣いや行動には、気をつけなければいけない時代になってきていますので、教え方を創意工夫して、皆さまの、特に指導者協会の大先輩は非常に良い経験をされていますので、その意見をどこかで発表して頂ければと思うのですが。

今、ナショナルデモは25名、ＳＡＪデモは50名いるのですが、普段から指導をしているデモとあまり指導経験のないデモもいるのですね。そういう意味では、目的を持ってスキーをしている方々が指導する環境の中に来ているということも言えますので、指導方法論を我々の方でも準備をしておかなければ対応できない時代になっています。皆さんの今までのご経験を何らかの形にして頂いて、研修会などで発表して頂いてアドバイス頂ければと思っています。

特に、普及活動にこれから力を入れていかなければいけないと真剣に思っていまして、このままの状態でいきますと、スキーも低迷してスキー場もなくなって、このスポーツそのものがだめになるのかなという危機感があります。ただ、日本の場合は日本海がある以上は西の方から低気圧が来ますので、湿度などと重なると必ず雪が降ります。

どこの国よりも雪に恵まれています。ただ降るタイミングがその年によって早かったり遅かったりするので、その不安定な状態でスキー産業がダメージを受けたりする事はあるかと思いますが、このスポーツはなくならないと思いますので、是非皆さんのご意見を、良いアドバイスをどこかの機会で発表して頂ければと思います。

13、各国のフォーメーション①

インタースキーでの各国のフォーメーションのビデオをご覧ください。

これは日本チームです。インタースキーではフォーメーションで技術を発表します。これはＳＩＡとＳＡＪのデモがミックスして９名で滑っています。

ここには技術のテーマも反映されています。先ほどは大回り系、今度はシュートターン、ミドルターン、ロングターンとミックスした形。

この時は雪が降ってちょっとスピードも出にくく、もたついたところもありましたが、基本的には上手なデモが多いので。これは技術テーマで、ロングとミドルとショートの基礎パラレルターンの展開をフォーメーションの中で演じています。

これがオーストリアです。10名位のフォーメーションで、ロングからセパレートしてクロスをしたり。真夏にやったのでどこの国もあまり練習ができていません。離れてみるとうまいのですが、真剣に見るとミスが確認できてしまいます。オーストリーはスキーのメッカということもあって、戦略に満ちたフォーメーションをやってきます。肉眼で見るともっと迫力があって、きれいなフォーメーションで仕上がっています。３本目、クロスを右左に編んできたり。

一人一人を見ると上下動を使ったり、オーソドックスな技で滑るのですね。ただタイミングが合うと非常にきれいに見えます。体が大きくて足が長いというのもあるのですが、少しゆったりした感じで正確に滑っているというのが印象的でした。音楽も当然各国から持って行くので、いろいろな音楽に添ってやっていきます。オーストリーにはウイーンがあることもあって、クラッシック系のもので、リズムにも乗ったダイナミックな滑りを演出しています。少し発想が違うといいますか、色々な歴史があるだけに構成がおもしろいです。飛んだり跳ねたりぐるぐる回ったり。こういう一般スキーヤーやボーダーも多いということをアピールしていました。

これはスイスチームです。最近のインタースキーではスノーボードを使ったり、テレマークやノルディックスキーというものも発表しています。使う道具によっては、一緒に滑ってくる難しさがあります。技量的にはかなり難しい事をやっているスイスチームだったような印象を受けます。

外国の方々は、フォーメーションの一人一人の滑りを見ると、非常にオーソドックスであまり難しいことをやっていないという印象がありました。

これはイタリアチームですね。イタリアには世界的なファッションに関するブランド会社があるのですが、このイタリアチームはなぜか日本のデサントのスキーウェアーを着ていました。

斜度が緩かったので、雪が降ってしまうと失速してスピードがないので、後半どこの国も手こずっていた印象を受けます。なので、後半は「一列になって大きく行こうよ」という形になっていた国が多いのですが。見ていても、伸びたり縮んだりと体を大きく上下に移動する技術を使って、重心を移動してスキーの操作を確実に行っているという、オーソドックスな所をイタリアも見せていました。

これはドイツです。ドイツはスキー場の数は少ない国なのですが、スキー人口は非常に多くて大体はオーストリア、スイスに滑りに行くことが多いですね。スキー人口でも 350 万人位いるのですね。

14、各国のフォーメーション②

ここ数回、インタースキーに参加させてもらっているのですが、必ずオープニングもしくはワークショップの前に、その国の技術的なフォーメーションを見せて、技術の解説をして「我々の国はこういう事をベースにやっていますので、ワークショップに参加して下さい」と言うのですが、前まではフォーメーション大会のようになっていて、ずっとフォーメーションばかりやっていたインタースキーも過去にありました。

これはアンドラという小さな国のデモンストレーションです。

これはアルゼンチンですね。地元開催となると、やはり滑る人数も増えてきますね。ショートターンとトレインと基礎パラレルターンのようなものが、トレインに入ってくるというような解説をしていました。向こうでも飛んだり跳ねたりする若者が多いのでということをアピールしていました。

同じ南半球の、オーストラリアの方も結構来ていました。このオーストラリアもスキー場の数が 12 ヵ所ほどあったと思うのですが，その年によって雪が少なかったり多かったりするのですが、少ない年が多くて、シーズンも短いということもあって、ここに来ていたデモの方の半分以上は、向こうの夏こちらの冬は、日本に来て活動しています。だから顔見知りが多かったです。

これはブルガリアです。次回開催地がブルガリア・パンポロボになっています。この間、視察団がミーティングに行っていますので、2 年後にブルガリアで開催します。

これはカナダです。雪が積もってしまったので、圧雪車も入らず滑りづらそうです。構成を変えてすっと同じテンポで来るしかなかったようでした。ちょっと残念だったのですが。

やはりカナダも、スキー以外にボードも盛んだしテレマークもということで、スキーそのものをス

キースポーツということで捉えていました。

15、各国のフォーメーション③

　これはお隣のチリ。チリもスキー場が多く立派な大きなスキー場がありまして。ナショナルチームも。スピード系の練習をしにチリに行ったりと。日本からもツアーを組んで８・９月にチリにスキーに行っている方も何人かいらっしゃいます。

　これはクロアチアですね。旧ユーゴスラビアが内争を終えて分離した所の一つで、サッカーとスキーが盛んな国です。バスケットとかも盛んな国なのですが、アルペンにおいても女子、一時は男子もいたのですが、非常に強い選手がいる所です。あまり良いスキー場はないのですが、スキーはすごく人気のあるスポーツなのです。ここもあまり型にこだわらずダイナミックに滑ってくる。
チェコですね。チェコとスロバキアが分離していますので、チェコの国なのですが、参加国として今回色々な発表をしていました。スキー人口も少しずつ増えてきている。昔の共産圏のイメージも全くないようでした。

　デンマークです。非常に背の高いスキーヤーも多く、見てわかるようにカラフルで派手な国で、明るく陽気な方が多かった印象があります。滑りを見ても非常に整っていてきれいにやっているので、すごく良いレッスンもしていました。

　フィンランドですね。北欧はキングオブスキーというと、クロカン、ジャンプで、当然生活の移動手段としてクロスカントリーが主流なので、アルペンの選手もいたのですが、どちらかというとノルディックの発表の方が多かったです。

　これはイギリスです。イギリスにはあまり滑る所がないはずですね。大体フランスとかスイスに滑りに来る方が多いです。ほとんどが海外に行って滑るというスキーヤーばかりですね。

　ハンガリー。この国は使っている道具とかが、ちょっと古かったイメージがあります。何年か前の道具を使っている感じです。

　ノルウェーですね。全体的には天候は良かったのですが、デモンストレーションの時だけちょっと天気に恵まれなかったという感じです。

　ポーランドです。最近ポーランドのスキー人口がめちゃくちゃ増えていまして、お金持ちも多くなって、オーストリーの氷河に行くと遊びに来ていますね。バスが何十台もポーランドから来ているという状況で、この国はスキーに対しては積極的に活動しているという風に思います。

　サンマリノです。イタリアの所にある国なのですが、なぜか毎回サンマリノのチームが来ると拍手が起こるのですね。理由がありまして、女性がきれいなのですね。だから皆拍手する。スキーの技術もそうなのですが、交流を深めて色々なことを発表していく。

　これはアメリカです。アメリカは指導者協会もあるのですが、あまりデモというようなカテゴリーがなくて、一地域の人たちが集まってチームを結成しています。

16、クローズセレモニー

　これはクローズのセレモニーのフォーメーションでオーストリーです。

　全体でこれ位タイミングを合わせるというのは結構難しいのですが、オーストリアは簡単にスッーとやってきます。一人ひとりのスキルが非常に高い表れかと思います。

　スイスもスノーボードが来て、テレマークが来て、この後にスキーが来るというように、「いろいろな種類のスノースポーツを提供していますよ」ということだと思うのですね。こういう演出もする

んですね。

これは日本チームです。和太鼓、笛もついて、大きな同調の滑りからトレインをして。こういう形で終わりました。

この後ポールを滑ってタイムを競う、順位をつけるというデュアルレースもやっていました。

こういうデュアルレースというのは盛り上がるのですね。日本チームでは、金子選手と佐藤選手が決勝まで残って表彰台に上がりました。

本格的な大回転もやっていました。フォームを整えてうまいだけだと速く滑れない。アグレッシブに速く滑る技と、きれいに滑りを見せる技がミックスしないと、デモチームというのはなかなか完成できないのかなと思っています。ですから、ジュニアの検定の所にポールがあるかと思います。

運営するには、スキー場側も開催する側もちょっとリスクがあるかもしれませんが、何か目標物を滑らせるということを、早いうちに経験させるということは非常に重要だと思います。理屈抜きでスキーを覚えますよね。そういう意味では、ポールは一つの指導法の中に入れておく必要があると思います。チーム対抗で滑ったりして。

17、終わりに

「次回のインタースキーはブルガリア・パンポロボです」という形で、インタースキーのビデオを皆さんに紹介しました。この暑い時期に雪を見るのはいいですね。ここ 3〜4 ヶ月雪の上に立っていないと思いますので、ちょっとイメージを作って頂けたかなと思います。

最後になりましたが、来るシーズンに向けまして皆さんが、自身で滑られる時の準備、道具もそうです調整をしていただく。そして、自然を相手にして道具を使うスポーツですから、道具をうまく操るとスキーの技術は必ず向上するものです。

道具を使うスポーツほどうまく準備をして頂きたい。夏の間から歩く、柔軟をする、関節を捻って可動範囲を広くする、というものを日常生活の中に取り入れていただけると体の準備も整います。ちょっとやっておくと全然違いますよ。

指導経験が豊富な皆さんですので、是非いろいろな立場にある後輩指導者の皆さんに刺激を与えて頂きたい。良いアドバイスをどこかで発表して頂ければと思います。研修会などで期待したいと思います。

以上をもちまして、私の講演とさせて頂きたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

森　信 之 氏 プロフィール

・１９６３年１０月９日生まれ。青森県むつ市出身。
・中学時代から日本のトップクラスの実力を発揮し、全国中学校スキー大会で２年連続２冠。
　この記録は未だ破られていない。中学３年で富良野ワールドカップ初出場。
・中学校卒業後アメリカ・ストラットンマウンテンハイスクールに留学。セントマイケルカレッジ卒業。
・全日本ナショナルチームの中心メンバーとして世界選手権、ワールドカップ等で長年活躍する。
・現役引退後基礎スキー界の技術をリードしたトップデモンストレーターとして活躍。
・１９９２年～ アルツ磐梯スキー場マネジメントの傍らスキー学校校長
・２００９年～ キロロリゾート株式会社副支配人、
・２０１３年～ 株式会社マックアース/スノーリゾート企画事業部
・２０１６年～ 株式会社マックアースＣＳＯ（国内で 34 スキー場を運営する国内最大手リゾート施設運営会社。北海道ではスノークルーズ・オーンズを運営）
・１９９８年～ 全日本スキー連盟デモンストレーターコーチ
・２００８年～ 全日本スキー連盟デモンストレーター監督